

げんでん ふれあい 福井

第24号

2006

SPRING

●高校生の文化イベント
「第25回近総福井」

●ふるさと福井
人物シリーズ 「若狭の杉田玄白」

●福井の
文学碑 「宇野重吉の演劇碑」



第7回げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞
表彰式=2/7 日本原電教習地区本部

財団では、2月7日(ふるさとの日)、平成17年度げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞の表彰式を日本原電教習地区本部会議室で行いました。前川財団理事長から受賞者一人ひとりに賞状、賞金、顕彰盾を贈り栄誉をたたえました。

5人の方々に、受賞の感想や文化活動の抱負などをインタビューしました。

人生は生涯学習



吉田 敏夫 氏
(鯖江市)

「べる恵まれた機会である」と思っています」と、生涯学習の信条を披露されました。

吉田さんの自宅を訪ねました。「今回の受賞は、多くの先人たちの良い足跡があったからで、多くの人々の支えに感謝しています。」と、控え目の言葉がこぼれてきました。今日までの長い俳句の創作活動や人生の中で一番大切にされてきたこととお尋ねすると「私の一生は、いかなる時も学びの途でした。人生とは、生涯学



幸光 八洲治 氏
(敦賀市)

幸光さんは、高校生時代から、県書道展に入選されるなど、半世紀に近い書道歴を歩んでこられました。今回の受賞を

書は創造的 精神の産品

昨年開かれた国民文化祭の文芸部門で大活躍された吉田さんに、福井の未来につなぐご意見をお聞きしました。
文化の祭典を一過性のイベントとしないうで、常に「新しさを目指す」ことが大切。特に福井の文化活動には、若い人々の底辺から進める必要性を強く提言されました。

第7回

(平成17年度)

げんでん

ふるさと文化賞
芸術新人賞

吉田・幸光・清水3氏
前田(洋舞)・山本(吹奏楽)氏に



財団シンボル
マーク

財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的にしています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にしたいと広報誌を目指します。

CONTENTS/24

■第7回げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞受賞者インタビュー	2・3
■第25回近畿高等学校総合文化祭福井大会	4・5
■ふるさと福井 人物シリーズ 若狭の杉田玄白	6・7
■第8回ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品展	8・9
■シリーズ15 福井の文学碑 「宇野重吉の演劇碑」	10
■伝統行事シリーズ 「粟田部の蓬萊祀」	11
■敦賀市立博物館誌上ギャラリー/18 「花卉園」板谷桂章筆	12
■「全国YOSAKOI衣 デザインコンペティション」 「戸田智江浪曲入門コンサート特別協賛」	13
■情報ファイル (平成18年度財団事業計画の概観ほか)	14・15

FRONT COVER



国選択無形民俗文化財 粟田部の蓬萊祀

(越前市粟田部町)

越前市粟田部町に古くから伝わる伝統行事「蓬萊祀」が今年も2月11日、華やかな山車の遊行でにぎわいました。山車は、同太神社周辺で1週間前から保存会の人たちの手で作られ、大きな米俵型の台座に、栗の木の枝に繻玉に見立てた「餅花」を付けた木を立て、竹串の餅20本を扇形に飾り付けます。木の回りには、赤い鳥居、御幣、松、竹、杉の枝などがあしらわれ、「修羅」と呼ばれる木そりの上に載せて造られます。当日、五穀豊穡、無病息災などを祈願する神事の後、山車は、音頭取りと呼ばれる古老の木遣り唄に合わせ、区民らが代わる代わる引き手を務め区内を練り歩きます。(関連記事11頁、ふくい伝統行事シリーズ)

ふるさと文化賞

吉田 敏夫(透思朗)氏
(俳句)

昭和29年、句作を始め、以来、常に新しい俳句を目指し、句集などを上梓。研鑽。平成5年、福井県現代俳句協会を設立し、会長として活躍。また、朝刊50余年の俳句誌「群」の代表兼編集長としてふるさと福井の俳句作家の育成に尽力されました。第20回国民文化祭ふくい2005俳句大会、文芸合同大会には、企画委員長として、福井文化の特色をアピールするなど、その成功に大きく貢献されました。

鯖江市日の出町 (78歳)

幸光八洲治(八洲)氏
(書道)

永年にわたり書道を研鑽され、県内、中央展で数々の受賞作品を発表。平成8年には、福井県代表として中国美術学院に留学。書の研修と友好交流に貢献されました。

昭和56年、敦賀市立博物館に日展作品を寄贈。また、市民講座などを開設し、後進の指導に力を入れられるなどふるさと文化の振興に尽力。一方、(社)若狭連道会の副会長などの要職を務め、本県書道界の発展に大きく寄与されました。

敦賀市舞鶴町 (85歳)

清水八洲男氏
(音楽)

昭和42年福井大学卒業。以来38年余、県内中、高校の音楽教員として勤務の傍ら、指揮者、演奏家として県内音楽界で活躍。学校吹奏楽部の育成では、丸岡中学校同部を4回にわたり全日本吹奏楽コンクール全国大会に出場させ、また県内の高校オーケストラ、ジュニアオーケストラの育成に貢献。平成元年、県下で初めて福井室内管弦楽団を設立し、主宰者兼指揮者として指導にあたり、音楽界の充実と、広く地域文化の普及向上に尽力されました。

福井市新田塚一丁目 (81歳)

芸術新人賞

前田美智代さん
(洋舞)

東洋大学文学部卒。昭和46年よりクラシックバレエを始め、フクイバレエ団ノムラ陽子氏に師事。平成3年、武生市で、前田美智代バレエ教室開設。以来、独自の創作バレエの振付・演出や生徒の育成に指導力を発揮されました。同12年以後のふくい県民文化祭、同17年国民文化祭洋舞フェスティバルに企画、出演し、大きな成果をあげるなど洋舞界の指導者として今後の活躍が期待されます。

越前市家久町 (43歳)

山本 麻澄さん
(吹奏楽)

昭和63年、福井大学教育学部卒。鯖江市東郷、中央吹奏楽部の指導にあたり、全日本吹奏楽コンクールの県代表として、北陸大会、中部日本大会に、常に金賞等上位入賞を果たし、その指導力は抜群。県内地域の文化行事にも多数出演。定期演奏会を開催し、音楽文化の普及に尽力。平成15年度より県吹奏楽連盟・常任理事も務め、この界の振興のため益々の活躍が期待されます。

鯖江市日の出町 (40歳)

私のモットー
「音楽を通して生きる力」

今回の受賞は「福井の音楽、特に、自らが音楽を愛しむ、そういう人口を増やすことが認められた」とらえ、喜んでいきます。

38年余、音楽教育に携わってこられた清水さんは「音楽を通して生きる力」を

育てること。更に「人生は短く、芸術は長く限りなし」と言われた恩師の言葉を信条として、県内オーケストラを育ててこられた情熱をうかがうことができました。

昨年、福井県で開催された国民文化祭を成功させるために、オーケストラ連盟を発足させたことや、文化活動の推進は「アマチュア」が主体であるべきだ」と、文化団体のあり方に指導的提言もいただきました。また、今年は、モーツァルト生誕250年。音楽愛好者を増やす施策に、今後とも頑張りたいと、頼もしい抱負もいただきました。

踊る楽しさと 夢のある舞台を

越前市にある前田バレエ教室を訪ねました。受賞をお伝えすると、「笑顔で接し



清水 八洲男氏 (福井市)

てくれる生徒さん、ご父兄、周りの方々のお陰です。」と感謝の言葉がかえってきました。「バレエの世界に入って、レッスンをしている子ども達はずいぶんいます。それはバレエを踊る楽しさからです。」その楽しさを観る人にも通ずる夢のある舞台を常に造っていくことをモットーにしています。」と。

昨年の国民文化祭の閉会式・グラウンドフィナーレに、色紙に自書した「舞」を掲げて入場した前田さん。書道に造詣が深いことを思い出し、バレエの指導力とあわせて文化への情熱の深さを知ることができました。

今後の活動についても、実技にプラスした心の成長を育てる教室を目指すという彼女の抱負に大いに期待がかけられます。



前田 美智代 氏 (越前市)

「魅せる 聴かせる」 感動を伝える音楽を

山本さんを鯖江市の中央中学校に訪ねました。受賞の感想をお聞きすると、開口一番「驚いています。これを励みに、生徒達と共に、この感動を伝えられるよう、音楽活動に取り組みます。」

今日までの活動方針として、「魅せる」「聴かせる」音楽表現を目指し、バレードや、コンクールなど、中学生らしい、明るく、パワーあふれる演奏と音楽を通じた交流が深められる工夫を入れたいとしました。と語り、山本さんの会話に、常に感動を与える音楽への愛着があふれていました。

昨年の国民文化祭の吹奏楽部門の実行委員を務めたこともあり、今後の県内音楽部門が吹奏楽を通して、身近に楽しんでもらえる活動に意欲を燃していました。



山本 麻澄 氏 (鯖江市)



第25回

近畿高等学校総合文化祭福井大会

2005
11/12-20

文化の帆を広げ 今こぎ出そう 無限に広がる 大海原へ

ファイ
ナリー

出演者全員が舞台に集結「夢の翼
I TRUST YOURSELF」
を合唱、ファイナリーを飾りました。



総合
開会式

若さを集結、文化の帆満開

県立
音楽堂

「文化の帆を広げ 今こぎ出そう 無限に広がる大海原へ」をテーマにした第25回近畿高等学校総合文化祭が、11月12日から20日まで9日間、県内4市町の14会場を舞台に開催されました。近畿2府7県から、音楽、演劇、美術など17部門に約6千人の高校生が参加。文化の競演を繰り広げ、熱い感動と交流を深めました。



「音楽堂風琴物語」～君の魂の奥へ～
演劇風琴



「生きる」をテーマに舞台一杯に演技する
仁愛女子高校ダンス部



開会式典、9府県代表生徒・旗手舞台上に勢ぞろい



書道吟と一筆書上「私へ」を演ずる吟詠剣詩舞
合同チーム



吹奏楽「Shake A tail Feather」を演奏する
武生東高校吹奏楽部

総合開会式は大会初日の12日、福井県立音楽堂で開催されました。第1部の式典は、敦賀高校マーチングバンドの華やかな演奏でオープニング。参加9府県の代表が舞台上に入場し、紹介が行われた後、生徒代表、主催者らが挨拶。県内高校の合同管弦楽団と合唱団が、同文化祭テーマソング「未来へ」を全員で合唱

し、会場を盛り上げました。第2部では、祭典を彩るデモンストラーションとして、県内高校生670人による多彩な部門発表が行われました。最初に、音楽堂備え付けのバイブオルガンを使った独奏「トッカータとフーガ」で幕開け。総合舞台劇「音楽堂風琴物語」のストーリーに

沿って、日本音楽(琴)、ダンス、吟詠剣詩舞、和太鼓による郷土芸能、弦楽アンサンブル、吹奏楽など各部門で熱演を展開し、最後に、出演者全員が舞台上に集結、「夢の翼」I TRUST YOURSELF」を会場一体となって合唱し、文化の帆満開のファイナリーを飾りました。



和太鼓「ようそろ」を披露した。福井農林高、餅山高、
嶺北養護学校の合同チーム



吹奏楽部門のトリを務めた丹南地区高校合同吹奏楽団(123名)は歌や踊りを交えて迫力あるステージを展開=11/20 県立音楽堂



部門別
発表など
スケッチ

発表・対局に深めた友情、
熱い感動

合唱、器楽・管弦楽部門



セントポール組曲第1楽章などを発表した大阪府立三島高校の弦楽合奏=11/13 県立音楽堂



朝鮮民謡を主題にした変奏曲を披露した奈良県立高取国際高校吹奏楽部

吹奏楽部門



パフォーマンスを繰り広げ、混声合唱する大阪府立春日丘高校チーム

美術・工芸



将棋の対局風景=11/19-20 福井県民会館
男子個人選手権で、福井県代表の真柄恵一君(小浜水産高)が初優勝を飾りました。

将棋

真柄君(小浜水産高)
初の栄冠



美術・工芸、書道、写真の3部門、約240点の作品が展示され、人気を集めました。=11/12-16 福井市美術館

11月20日から9日間、全17部門が行われた「近畿」福井大会は、県立音楽堂で開かれた吹奏楽部門の終了後、熱気に満ちた同会場で閉会式が行われました。
主催者、生徒代表らがあいさつ。続いて大会旗が、生徒実行委員会委員長の大馬渡志野さんから次期開催地の兵庫県代表の大塚恵さん(須磨東高・2年)に引き継がれ、今大会での友情の輪と深めた感動を誓い合い閉幕しました。

大会旗 次期兵庫県へ



閉会式で、大会旗を次期開催地の兵庫県代表に引き継ぎ、友情と感動の大会の幕を閉じました。

11月20日、越前市武道館で開かれた「小倉百人一首かるた」の団体戦(7府県参加、1チーム5名)で福井県チーム主将・川崎文義君(武生高2年)が、熱戦の末、見事優勝を飾りました。

「かるた」本県チーム優勝

若狭の杉田玄白

—日本近代医学の先駆者—

文／永江秀雄氏

(上)

今回のシリーズでは、日本近代医学の父といわれている、若狭の人、「杉田玄白」を取り上げました。

県立若狭歴史民俗資料館在職時代から、玄白の業績やその一生の研究に造詣の深い郷土史家永江秀雄さんに、2回に分け、執筆をお願いしました。

江戸、小浜藩
下屋敷で生まれる

日本の近代医学、また近代文化の先駆者ともいわれ、特に「解体新書」の翻訳者として有名な杉田玄白は、わが若狭の人、小浜藩の藩医でありました。小学校の社会科の教科書にも、杉田玄白は「小浜藩（福井県）の医者」であったことが書かれています。意外なことを承知されない方が、少なくありません。

杉田玄白は、徳川吉宗将軍の時代、享保十八年（一七三三）九月十三日、江戸



正面に「小浜藩藩跡」左面に「杉田玄白生誕地」と刻まれた顕彰碑＝東京都新宿区矢来公園内

の牛込矢来（現在の新宿区矢来町）の小浜藩主酒井侯の下屋敷で生まれました。父は小浜藩医の杉田雨仙、母は蓬田玄孝の娘であったということです。この時、母親は大変な難産となり、出産の後亡くなりました。みな産婦を助けることになり、切りになっていました。布片に包まれて側に置かれていた赤ん坊は、幸いにも無事であり、これが母の命と引き替えに誕生した、杉田玄白の劇的な人生の始まりでありました。

玄白の父雨仙は、医家としての杉田家の二代目で、小浜藩主酒井家の忠告から忠告までの五代に仕え、奥医師にも任じられた藩医でした。その雨仙の父で玄白の祖父に当たる初代杉田雨仙は、越後新発田藩を去り若狭に来て、元禄十六年（一七〇三）に、酒井家に召し抱えられたという事です。玄白が生まれた時には二人の兄と姉一人があり、実母の歿後に迎えられた養母（雨仙の後妻）には、一女（妹）が生まれています。

PROFILE



郷土史家
永江秀雄氏

昭和2年、若狭町で出生。福井師範学校卒業。地元小学校教員、農協職員、歴史編集執筆委員、上中町教育委員等を歴任。昭和57年から22年間県立若狭歴史民俗資料館嘱託として、民俗、伝統文化の調査・研究に取り組まれ、多くの功績を残されました。

平成12年、文化財保護法50周年記念特別功労者として文部大臣表彰。同13年、当財団げんてんふるさと文化賞を受賞されました。

少年時代
若狭・小浜で過ごす

江戸語であった父雨仙が、元文五年（二七四〇）九月に、國元の小浜藩を命じられたので、玄白たちも若狭小浜に帰って来ました。この時、玄白は数え年八歳であり、父が再び江戸語となる延享二年（二七四五）五月、十三歳まで、ちょうど現在の小学生の年代を、郷里の若狭で暮らしたことになります。

感受性の強い少年期を小浜で過ごしたことは、いろいろな人々との接触、あまり頑健でなかった玄白が美しい自然の中



「形影夜話」に載せられている杉田玄白の肖像画（画家 石川大浪筆）

で育ち得たこと等、将来のために好ましい体験であったと考えられています。玄白が七十歳の時に書き、後に出版された「形影夜話」の中に、この小浜在住の時の思い出として、それぞれの技の達人ともいふべき幾人かの事例を、直接に見聞したことが述べられているのも、その例証といえると思います。

初代の祖父は二代目の雨仙を極めて厳格に訓育したようですが、父の雨仙はわが子の玄白に強制するようなことはなく、その自発を待ったようです。玄白の長兄は早世し、次兄は他家を継いだので、自分が後継者となるべき自覚も強まったのが、青年玄白は十七・八歳になって、父に向かい「今から良い師匠について、医学を習いたい」と申し出たということになります。

父雨仙は「その言葉を待っていた」と大いに喜び、漢学の師に宮瀬龍門、医学の師には西玄哲を選んで学ばせました。宮瀬龍門は、著名な儒学者荻生徂徠の高弟服部南郭に師事した学者です。西玄哲は、当時の江戸でのオランダ流外科の第一人者ともいわれ、幕府の奥医師も勤めています。それぞれに最適と思われる師匠を、父は選んでくれたわけです。もちろん、この両師だけでなく、玄白は生涯を通じて多くの方々から、多くのことを学んでいます。

玄白外科医への道

玄白が時の藩主酒井忠用（忠用）に召し抱えられ、藩医となつて間もなくのこと、宝暦四年（一七五四）に、京都の著名な医師山脇東洋により、初めて官許を受け公認されたの人体解剖（観察）が行われまし。新罪処刑された男性の死体が解剖に付されたわけですが、京都所司代にその許可願を提出したのは三名の小浜藩医で、その内の二人は山脇東洋の門下でありました。その一人の小杉玄通が、自分も立ち合つた解剖観察の模様を、江戸に出て玄白に詳しく伝え、更なる発奮の契機を与えることになったのです。なお、この



公立小浜病院の前に建てられている
杉田玄白の銅像

解剖の願ひ出を、優れた理解と英断を以て許可した、時の京都所司代とは、小浜藩主酒井忠用その人でありました。
山脇東洋は、その観察（観察）結果や関連事項を、わが国最初の実証的解剖書『蔵志』として、五年後の宝暦九年に出版し、当時の日本の医学界に大きな衝撃を与えたということです。この『蔵志』の中には、人体の解剖が許されない時代に



山脇東洋肖像

は、動物のカワウソと人間の内臓は同じなので、それを解剖して見るようにと言われていたが、結果は全く違うものであったとも書かれています。また、犯罪者として処刑され、解剖に付された男性に対し、心からの慰霊と感謝の言葉（祭文）が収められており、私は深い感銘を受けています。

玄白が三十七歳の時、明和六年（一七六九）に、父の甫仙が亡くなり、玄白は酒井侯の侍医となつて、住居も酒井家の中屋敷へ移つたということです。そして、玄白晩年の回顧録「蘭学事始」にも書かれている通り、「山脇東洋先生の『蔵志』をも見て、自分も観察をした」と思っていた」との、かねがねの念願が、実現に向かいつつあることが述べられています。

「ターヘル・アナトミア」との出会ひ

明和八年春のある日、同じ小浜藩医の中川淳庵が、江戸参府のオランダ商館長一行の定宿にて、一行の一人から解剖学の二冊の書物を出して来て、玄白に見せました。希望者があれば譲つてもよ

い、ということでありました。その中の一冊、いわゆる「ターヘル・アナトミア」を手に入れた、玄白は熱望しました。

しかし、家が貧しくて買うことができないため、玄白は小浜藩の家老である岡新左衛門の所へ行き相談を致します。新左衛門に、求めておいて役立つものかを尋ねられ、玄白は必ずとの自当ではないが、是非とも役立ててお目につけたいと答えています。ちょうど居合わせた、新左衛門と同じ儒学者で、藩主の学問のお相手役でもあった倉（後に青野）小左衛門も、杉田氏はこれを無駄にする人ではないから、と助言してくれました。

こうして、その代価は、お上より下し置かれるよう取り計らいがされました。すなわち藩主酒井忠用によって、玄白のために「ターヘル・アナトミア」は買ひ与えられたのです。これは「蘭学事始」にも明記されている有名な事実です。この藩主酒井忠用は、自らも学問に精励する名君でありました。主従ともに、この



中川淳庵肖像

ような理解があったればこそ、その翻訳に始まる日本近代医学の曙がもたらされたのであります。

オランダ語で書かれたこの「ターヘル・アナトミア」は、玄白には「一字も読めないけれど、その諸図は臓腑・骨節が、これまで見聞きして来たことと大いに異なり、これは必ず実践して図説した



小浜児童公園に建立された杉田玄白顕彰碑

もの」と考えられるので、その図を実物に照らして見たいと玄白が思うのは当然のことでした。しかも、この書物が入手できたばかりの時、「この学問の間かれる時機が来たのか」、「不思議とも妙とも言おうか」として、同じ春の三月三日の夜、明日「蘭分」（解剖）が行われるので、希望ならば千住の骨ヶ原の刑場へ乗り越されよと、江戸の町奉行・曲淵甲斐守の家来から知らせの手紙を受けたことや、その成り行きが、「蘭学事始」に詳しく記されています。

玄白はこれを非常な幸運と喜び、これは自分独りで見るべきことではないとして、まず同僚の中川淳庵を始め、同志の人々にも知らせています。また、十歳ばかり年長で当時は交流も稀であった前野良沢にも、辻麗龍をやとつて手紙を届けさせたところあります。翌四日の朝、定めておいた場所に、良沢やその他の朋友も集まり、連れ立って骨ヶ原の観察の場所へ行き、ここで玄白たちは全く初めての、真剣な解剖の観察をすることになります。

（以下次号へ）

第8回

ふるさと大賞 写真コンテスト

第8回「ふるさと大賞」写真コンテストに378点の応募がありました。1月12日、審査会を開催し、ふるさと大賞1点、ふるさと賞2点、優秀賞3点、審査員特別賞1点以上作品誌上紹介、入選26点、佳作25点が選ばれました。(関連記事p.15頁・写真入賞作品展)

ふるさと大賞



三澤 明彦氏
(坂井市(旧丸岡町))



「持ち上げろ!!ガンバレ!!」

「写真は瞬間の芸術」と言われていますが、まさにこの写真は顔と姿勢の苦悩の決定的瞬間をストロボを使って捉えたモノと言えます。丸岡町の伝統神事「表見の米」の祭りで、重量ある木臼を持ち上げ、力自慢する人の一場面です。被写体の良さにも恵まれ、表情、手つき、足の格好など素晴らしい姿の瞬間を良いカメラアングルで撮影され、チャンスをものにされた技量は見事です。ふるさと大賞にふさわしい瞬間の写真で決まりました。(講評/八木隆)



男衆が、横笛を吹きならし、通り過ぎて行く。赤と黄の鮮やかな衣装が緑に包まれた谷あいの風景に、ひととき映えています。子供の姿も垣間に見え、老いも若きも村の人々が一体となり、堂々と守り続けてきた伝統の祭りであることが伝わってきます。横笛の清冽な音色が谷間に響き渡り、信仰の深さゆえか、一瞬の静けささえ感じられる作品となっています。

(講評/水谷内健次)

「おじいちゃん」と清水照夫氏

(福井市(旧清水町))

ふるさと賞

一般の部

「草相撲の日」 関 松鯉氏 (敦賀市)



「のこった、のこった」。「あー」。そんな声が響こえてきそうです。草相撲とはいえ、力士らの見事な体つき、板に付いたまわし姿は頼もしさを感じます。鮮やかな技で投げ飛ばされる青年力士。悔しそうな表情から、真剣な闘いぶりうかがえます。地元の奉納相撲で、一息一暮する住民や力士らの振舞いは温かさに溢れています。動と静を絡め、祭りの白のほのぼのとした光景を素直なアングルでとらえています。(講評/熊山卓司)

審査委員	審査委員長	八木 隆	写真家
	審査委員	勝山 章司	福井新聞社写真部部長
	審査委員	野田 訓生	福井県立美術館学芸員
	審査委員	水谷内健次	写真家
	審査委員	三好 勝巳	フジカラー北陸福井事業部営業部長
	審査委員	前川 則夫	当財団理事長
	審査委員	白川 和充	日本電子力発電株式会社取締役・敦賀地区本部長

(敬称略)

シリーズ15 福井の文学碑

宇野重吉の演劇碑

日本の演劇界のリーダーで、劇団民芸の創始者でもある宇野重吉さんの演劇碑が福井市太田町の平乗寺境内の一角に建てられています。

平乗寺は、浄土真宗本願寺派で、宇野さんの生家・寺尾家の菩提寺です。山門横の石段の上、3に四方の生け垣に囲まれてさりげなく立つ自然石の碑は、宇野さんが子供の頃から大好きだった、文殊山を見上げるように向き合っ

て建てられています。石は、高さ約1m、横幅1.5m。宇野さん自身が選んで来たという木曾の山石です。碑面には、宇野さんの自筆で「新劇 愉し哀し 宇野重吉」と刻まれています。



「新劇 愉し哀し 宇野重吉」と刻まれた演劇碑—福井市太田町 平乗寺境内



1983年4月福井公演で来福された当時の宇野重吉さん

この碑文は、昭和44年(1969)に発行された宇野さんのエッセイ集の題名で、その本の中に「芝居は楽し哀し」と、綴られていることから、ふるさと福井を愛し、芝居一筋に生きた宇野さんの人生そのもの、演劇への情熱を表現した言葉ではないのでしょうか。

郷土を愛し、演劇人生の記念碑

この碑の建立の由来と宇野さんとの思い出を「宇野重吉顕彰市民の会」の代表細川政治さんは次のように語ってくれました。

碑の建立が計画されたのは、1980(昭和55年)の4月でした。福井市出身の演劇人でありながら、これまで、宇野さんにちなむ記念すべきものが、何一つありませんでした。

丁度、劇団民芸の創立30周年を記念する意味もあって、演劇碑の建立が企画されました。当時、福井「民芸の仲間」の世話人だった品川一雄氏(品川書店社長)や、福井新聞社・吉田歌介社長が発起人になって、「宇野重吉後援会」をつくり、広く県民に一口千円の拠出を呼びかけました。

その結果、多くの方々から26万円余の寄金が集まりました。これに福井新聞社が特別寄金40万円を拠出、総額66万円で、演劇碑が完成したのです。

同年11月17日午前10時から、県内の宇野重吉ファンや近所の人のほか、「息子の結婚」公演で福井に来ていた劇団

民芸の奈良岡朋子さん、大滝秀治さん、米倉喬年さん、客演の大竹しのぶさんら劇団員30人も参加して、除幕式が行われました。

当時の福井新聞によりますと、席上、宇野さんは「劇団民芸結成30周年で何もなかったもので、記念にと想い碑の建立をお受けしました。面はゆい気持ちです」と、少し照れくさそうに話していたそうです。

宇野さんは、ふるさと自慢が有名で、常に福井を全国にアピールしていました。

「ほいでなんやの、昔と比べると福井もめっほういいもんになって、たいしたもんや。みんなしっかり、頑張っ

文殊の里周辺図



「越前の海は青く、雲は白く。カニやエビは赤く、いいなあ福井は」これらの文句は、78年から約10年間、テレビやラジオで流れた宇野さんの福井讃歌でした。

「新劇 愉し哀し」の碑は、宇野さんの輝かしい業績をたたえると同時に、その演劇人生を支えた郷土愛の記念碑でもあるのです。

宇野さんの略年譜

宇野重吉 1914(大正3年) 昭和63年、俳優・演出家。足羽郡下文殊村太田(現福井市)で生まれる。本名・寺尾信夫。旧制福井中学校を3年で中退し上京。32年日本プロレタリア演劇研究所に入り、東京左翼劇場「逆立つレール」で初舞台。38年と43年、2度応召。45年復員。戦後の新協劇団に参加。50年、滝沢修、清水将夫らと劇団民芸を創立。旗揚げはチェーホフ作「かもめ」。59年、堀田善衛作「運命」を初演出で読売演劇賞、以来、芸術選奨などさまざまな芸術賞を受賞。81年、紫綬褒章。86年(87年)、宇野重吉一座旅行。88年、福井県第1号の県民賞を受ける。同年1月9日、73歳で死去。

シリーズ

ふくいの
伝統行事

国選択無形民俗文化財

粟田部の蓬菜祀

越前市
粟田部町



五穀豊穡などを願って区中を練り歩く
蓬菜祀—越前市粟田部町

としての性格が強くなり、我が国の年中行事や民間信仰の変遷を考へる上で貴重なことに加え、地域の特色が豊かであることが認められ、昨年1月、国選択無形民俗文化財となりました。

地元では、この採択を契機に、伝統の祭りを見直す声が高まり、区内の各団体でつくる



三里山の麓に鎮座する民大神社

になって初めての蓬菜祀。区域が変わっても、旧今立町に根付いた文化はしっかりと後世に伝えていきたい」と意欲ある喜びを披露していました。

山車は、当日の1週間前、神社の境内で、昨秋に集めておいた藁を大きな丸い枠に詰めて束にし、巨大な儀を作り上げます。

山車に花餅を飾り豊穣を願う

「蓬菜祀保存会」を結成。今年は、その初の実施となりました。

保存会の初代会長の井筒一郎さん(粟田部)は、神事の挨拶で、「昨年10月、越前市

花屋公園の野外舞台では、会員がついた餅を地元の小学生たちが粟の木に次々と巻き付ける作業を手伝いました。

祭り当日の朝、「修繕」と呼ばれる木ぞりの上に、大きな儀型の台座が置かれ、粟の木

の枝に藁玉に見立てた「餅花」を付けた木を立て竹串の餅20本を扇形に飾り付けます。屋台には赤い鳥居、御幣、鏡餅、松、竹、杉の枝などをあしら

い、高さ、長さとも約6倍、幅3分の豪華な山車が作り上げられます。

社務所に保管されている、



餅花など草やかに飾られた山車
出発を前に厳かに神事

言伝えによると、江戸時代には、山車を終日街中を曳き回すため、神事中往來の通行は厳しく、葦笠着用は何人といえども禁じられる程の特権が与えられ、また、福井藩からは、礼服着用の警護人が派遣されるという格式の高い神事であったと伝えられています。

言伝えによると、江戸時代には、山車を終日街中を曳き回すため、神事中往來の通行は厳しく、葦笠着用は何人といえども禁じられる程の特権が与えられ、また、福井藩からは、礼服着用の警護人が派遣されるという格式の高い神事であったと伝えられています。





「花卉図」

板谷桂意筆

本図は、椿の模様があしらわれた藤製の編み籠に、山吹・椿・八重桜をそえた晩春の花卉図です。

山吹は、金色の花びらが風にそよぐ様子から、初めは「山振」の字があてられたといわれています。この図では、しなやかな枝が風に揺れるかのごとく生けられ、金泥の盛り上げによる彩色が花びらの美しさを一層際立たせています。

また、中央に配された椿には深紅の朱が施され、葉の緑青と併せて生き生きとした躍動感を画面にもたらしています。特に葉にいたっては、輪郭線から葉脈にいたるまで神経を注いで彩色されているの

が見受けられます。

さらに、八重桜は胡粉盛り上げを施し、雌蕊を点描で表すなどの工夫がなされています。ゆるやかに下方へと枝をしならせる山吹に対し、上部へと延びる八重桜の対照的な描写が画面により動性を与えています。

花の命は短いといわれますが、短さ故の美しさを十分に表した作品といえましょう。

筆者の板谷桂意は、宝暦10年（1760）に幕府お抱え絵師・板谷広常（慶舟）の次男として出生。名は広長、天明2年（1782）37歳の時、従来用いた慶意の称号を桂意に改めました。文化11年（1814）55歳没。

解説（敦賀市立博物館・

森田恵理子）

- 絹本着色
- 縦五〇・四 横八二・〇 cm
- 江戸後期
- 落款 「桂意廣長筆」
- 印章 「廣長」朱文方印

全国YOSAKOI **衣** デザインコンペティション 1/29



大賞に輝いた「朝日蒼天龍神」の
活気あふれる演技—サンドーム福井

朝日蒼天龍神 (越前町)が大賞

「YOSAKOI」演舞衣装の出来栄を競う「全国YOSAKOI衣デザインコンペティションinふくい」(ふくいファッションイベント実行委員会主催、事務局・県地域産業・技術振興課、当財団協賛)の最終公開審査会が、1月29日、サンドーム福井で開かれまし。県内外13チームが自らデザインした衣装を着て、活気あふれる踊りを披露。審査の結果本県の「朝日蒼天龍神」が大賞に輝きました。

このコンペは、福井県産の織物を広くPRしようと初めて企画されました。全国38チームから寄せられたオリジナルデザイン画で1次選考を実施。通過した県内5チームを含む13チームが最終審査会に挑みました。

各チームとも工夫を凝らした華やかな衣装で登場。ステージでは、初めに衣装のポイントを説明した後、熱のこもった演技を披露しました。審査には、東京都在住のファッション

デザイナー・島中巧さんら4人があたり、この日の演舞を見てマフアッション性、県産生地の特長が生かされているか▽舞台映え—などを基準に審査されました。その結果、鮮やかな青と白を基調に地元で盛んなホッケーのユニフォームをイメージした「朝日蒼天龍神」が「スポーティに仕上げた法被、衣装、演舞、曲ともすべてコンセプトも一貫していた」と、高い評価がされ、大賞に選ばれました。



財団賞を受ける磨留子遊☆舞夢チーム

大賞以外の入賞チームは次の通り。

▽優秀賞 於天羽(静岡県)▽奨励賞 イッチョヨラインPO賞 よさこい新発田(和歌山)▽新発田(新潟県)▽同 福井人柄倶楽部賞 益田幡竜おどり隊(鳥取県)▽同 織協ビル同業会賞 KITA(石川県)▽同 げんでん(ふくあひ)福井財団賞 磨留子遊☆舞夢(坂井市(旧丸岡町))

戸田智江浪曲入門コンサート

特別協賛

児童 浪曲を舞台で挑戦

福井

福井市出身の演歌歌手で浪曲師としても活躍している戸田智江さんの浪曲入門コンサート「ねぎぼうずのあさたろう」(福井新聞社主催、特別協賛げんでんふくい(福井財団))が、2月8日、福井新聞社・風の森ホールで開かれました。

開幕の前段は、浪曲風絵本「ねぎぼうずのあさたろう」の著者である飯野和好さん(東京都)が三度笠に、旅装束姿で登場。舞台のスクリーンに同名絵本の場面をスライド上映しながら口演し、観客を楽しませました。この公演は、日本の伝統文化である浪曲を、わかりやすく、楽しいものにして子供たちにも親しんでもらおうと企画されたもので、当日は、



戸田さん(左端)らの見守られる中 浪曲を披露する中藤小の児童たち

福井市の中藤小5年生と嶺北養護学校生合わせて百人を招待、公募で選ばれた約120人のファンと一緒に鑑賞しました。ステージでは、中藤小学校の児童10人

が浪曲入門。4、6人が1組になって、夢などをテーマに自分たちで考えた詩を、三味線の音に合わせて、飯野和好さんや戸田智江さんの指導を受けながら練習成果を披露しました。

後半は、戸田さんの公演にうつり、浪花亭友歌さんとして「ねぎぼうずのあさたろう」を、粋な関東節と道中東海道の



芸名・浪花亭友歌として浪曲を熱演する戸田さん

物語などを七変化の語り口で歌い上げました。続いて、コンサートでは、小学校時代のなつかしい福井の思い出をトーク。中藤小・音楽教師のピアノ伴奏で「ふるさと」や夏川りみさんの「涙そうそう」などを歌い上げました。

最後に、飯野さんが再登場。中藤小4人の児童が舞台上がり、戸田さんと一緒に「ねぎぼうずのあさたろう」浪曲の1節を三味線の伴奏にのって合唱。浪曲の魅力を披露して会場から大きな拍手が送られました。

第6回 日英小学生絵画交流展

12/3~18
20~27

お国柄の多彩な絵に人気 教賀



日英交流と友好を深めた
絵画交流展＝敦賀原子力館

17年度で連続6回目となる日
本・イギリス小学生絵画交流展
は、財団、原電、BNFL社が
共催して、12月3日から18日ま
で、敦賀原子力館、同月20日か
ら27日まで、げんでんふれあい
ギャラリー（敦賀市本町2丁目）
で開催しました。

4小学校の48点の作品と敦賀市
の5小学校（中央・松原・常
宮・香見・西浦小）から44点が
出展されました。

「私たちのくらし」をテーマに
描かれた92点の作品は、それぞ
れお国柄が出た楽しい絵画で訪
れた人たちの人気を集めていま
した。

交流展の初日、作品を出展し
た5校の小学生と保護者ら約百
名が出席し、開幕のセレモニ
ーが開かれました。主催者挨拶に
続き、敦賀市教委、学校長、B
NFLジャパン代表のお祝いの
ことばの後、イギリスの紹介や
向うでの交流展の様子などが報
告され、両国の友好・交流の輪
を確かめました。

アトラクションでは、平成16
年度財団芸術新人賞に輝き、県



開幕に花を添えた平岡さんの
マリンバ演奏

内音楽界のマリンバ・パーカッ
ションで活躍されておられる平
岡さんらを迎え、ミニコン
サートを開きました。日本の歌
曲「ふるさと」やイギリスの民
謡などを演奏。マリンバの美し
い音色と演奏の手さばきに大き
な拍手が送られ交流展の幕開け
に花を添えました。

平成18年度 財団事業計画・予算決まる

文化支援を柱に6重点施策



18年度事業計画及び予算案
を審議する第24回理事会

平成18年度の財団事業計画と取
支予算は、3月9日、第25回評議
会と第24回理事会を開催し、提案
とあり可決されました。

18年度の財団の基本方針として、
本県の新しい時代への文化環境に
対応し、ふくい文化の育成支援を
柱に、6重点施策を展開すること
とし、これらの関連予算を編成し
ています。

6重点施策

1. 文化団体等の活動支援の
ための助成制度の整備充
実
2. ふくい県民文化祭および
県内高校文化部活動の支
援
3. 魅力ある文化イベント提
供事業の推進
4. 文化、芸術を愛する県民
風土を高める顕彰事業
5. 地域に根ざしたふれあい
活動の推進
6. 信頼される財団広報活動
の充実

予算総額(歳計)9,530万円

18年度予算は、総額（一般会
計）9,530万円、重点施策を焦
点に予算配分を行い、事業費総額
7,350万円を計上。財団寄付行
為で規定している事業区分の内訳
は次のとおりです。

1. 地域文化の振興事業
1,710万円
2. ふれあい・ゆとりの
創造事業 1,160万円
3. 芸術鑑賞機会の提供・文化
創造事業 3,180万円
4. 優れた文化活動に対する
顕彰事業 830万円
5. その他の事業（HP、
広報誌の発行など）
470万円

家庭のルールは「思いやり」の対話



雄弁を振る桑原征平さん
＝敦賀市プラザ萬象

財団では、敦賀市連合婦人会と共催して11
月12日、敦賀市プラザ萬象で元テレビ放送局
アナウンサーで、大阪芸術大学・客員教授の
桑原征平さんを招き、「大人達よ、子供に今
こそ語ろう！」をテーマに文化講演会を開き
ました。

桑原さんは、最近のテレビ放送を巡る情報
化社会の時事問題をはじめ、家庭生活におけ
る親子のマネー問題など多彩な話題を取り上
げ、時折り、漫談を交
えた雄弁振りに、参加
した約120人の会員
らは、熱心に聴き入っ
ていました。

桑原征平氏を招き 文化講演会

11/12

敦賀

はじめに、テレビが
地上デジタル放送時代
に入り、2011年には
日本全土に及ぶ変革
の時代を迎えることや、
これに伴う家庭経済や
家庭内での親子の処し
方を大切にすることを
指摘。また、最近の都
会と田舎の子供達の自
然との共生問題の違い
に触れ、自然環境への
感動と体験を積むこと
の必要性を強調しまし

た。一方、家庭電気製
品などの利便性が進ん
だこともあり、家庭内
での親子間のルールや
子供へのしつけが放棄
されていることをあげ、
温もりと思いやりのあ
る対話を通じた「子育て」
を提言していまし
た。

最後に、地球環境問
題や世界の宗教・文化
の認識問題などに触れ、
「国際平和を次代に引き
継ぐためには、人間的
「思いやり」の実践こそ
大切。」と訴え、講演を
締めくくりました。



表彰式で財団賞を受ける受賞者
=2/11 福井新聞社風の森ホール

品が選ばれました。
財団では、小・中学生の推薦作品の中から11点の作品に、「げんてんふれあい福井財団賞」を贈りました。

特選 小・中11作品に財団賞

第70回 県かきぞめ競争書大会に 特別協賛

第70回かきぞめ競争書大会（福井新聞社主催、(社)若越書道会共催、当財団特別協賛）には、今年も小学生から大学生までの14分野に、約7万点をこえる作品の応募がありました。第一次審査を通過した3567人が、1月28日、県内13会場で、課題に挑戦し、かきぞめ席上揮毫が行われました。
書きあげられた作品は、翌29日、福井新聞社で、若越書道会会員約百人が書のバランスや正確さ、力強さなどをチェック、慎重な審査が行われました。その結果、最優秀の大賞には小浜2中3年の森咲喜さんら4人が選ばれたほか、推薦146点、進推薦、奨励賞の各賞作



推薦以上の表彰式は2月11日、福井新聞社・風の森ホールで行われ、大賞4人をはじめ推薦以上の入賞者一人一人に、福井新聞社の吉田哲也社長らから手渡されました。財団賞を受賞された方は次のとおりです。

- ▽かまやなお (毛筆・粟野小1年)
- ▽ありさか空 (硬筆・敦賀南小1年)
- ▽田川ひなの (毛筆・木田小2年)
- ▽竹長みお (硬筆・雲浜小2年)
- ▽島田園子 (硬筆・大向小3年)
- ▽小間澤 (粟野南小4年)
- ▽見附由梨 (兵庫小5年)
- ▽金本啓一郎 (雲浜小6年)
- ▽堀江真弘 (春江中1年)
- ▽梨子木見依 (小浜中2年)
- ▽海藤三香 (足羽中3年)

(敬称略)

17年度県新人演奏会 オーディション 2/26 3/26

演奏家の登竜門・研鑽成果を発表 福井



練習の成果を発表する参加者
=2/26、県立音楽堂

県文化振興事業団主催の17年度県新人演奏会(当財団協賛)の公開オーディションが2月26日、福井市の県立音楽堂小ホールで開かれました。
この演奏会は、県内在住か、本県出身で音楽の道を歩む若手音楽家を発掘

することを目的で、毎年度開かれ、新人演奏家の登竜門となっています。
本年度は、県内外の音楽系大学生、卒業生のほか高校および中学生4人を含む37人が、ピアノ、声楽、器楽(サクソフォーン・フルート・ヴァイオリン)の3部門に応募。それぞれの演奏や歌唱で、持ち時間(ピアノ、器楽13分以内、声楽12曲まで)以内に、日頃研鑽の成果を披露しました。
審査では、ピアニストの夢沼恵美子さんら5人の審査員が当り、ピアノ部門で11人、器楽部門で2人、声楽部門で2人の計15人が合格しました。
3月26日には、同音楽堂で、合格した新人演奏家による演奏会が開かれ、オーディションと同じ曲目を披露。会場からは、若手演奏家に、将来を期待する大きな拍手が送られていました。

第8回 ふるさと大賞 写真コンテスト 入賞作品展 1/31-2/12 2/17-22

祭り と 豊かな感性作品並ぶ 敦賀 福井



上位入賞作品に見入るカメラファンら
=敦賀市・げんてんふれあいギャラリー



力作を鑑賞する人たち=福井市ショッピングシティ「ベル」

会場には、応募作品378点の中から選ばれた、ふるさと大賞1点、ふるさと賞2点、優秀賞3点、審査員特別賞1点をはじめ入選、佳作各26点、計59点の作品が展示。コンテストの審査委員長の八木隆さんは、「今回は、県内にはユニークな祭りが多く、全体としては素直に撮った美しい写真が多かった。上位入賞作品では、一瞬のシャッターチャンスを見事にとらえた作品や色調の工夫をこらしたものなど秀作も目立ちました」と総評。多彩な祭りとその感性でとらえた力作に、訪れた愛好者の目を魅かせていました。

財団主催の第8回ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品展示会を、1月31日から2月12日まで、げんてんふれあいギャラリー(敦賀市本町2丁目)で、同月17日から22日まで、福井市花堂南2丁目、ショッピングシティ「ベル」で開きました。

読者アンケートのご回答のまとめ

げんでん 福井第23号

本誌第23号のアンケートに総数29通のご回答をいただき、ありがとうございました。
その結果を下表にとりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり、本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願い申し上げます。



Q：第23号で良かった記事は？

- 「第20回国民文化祭ふくい2005」
深まる文化・感性の絆を演出 19%
- 国文祭協賛・茶室おこし絵図展・
人間国宝を迎え 狂言を楽しむ会 5%
- 福井県海浜自然センター訪問 5%
- ふるさと福井人物シリーズ
由利公正～生涯を貫く「至誠」の心～ 16%
- シリーズ14 福井の文学碑
永平寺門前町に道元禅師9基の歌碑 18%
- 伝統芸能シリーズ 八田獅子舞 13%
- 敦賀市立博物館誌上ギャラリー/17
百蓮翡翠園 岸物筆 7%
- 情報ファイル 9%
- その他 1%

本誌への主なご意見

- 国民文化祭特集をみて、福井県にとって大きな祭典であったことを実感した。
- 由利公正シリーズで人物の偉大さを知って大変良かった。
- ふるさと福井シリーズなど本にして出版したらどうか。
- 読者から俳句を募集して、誌上で公開したら。
- 福井の伝統野菜や郷土料理など取り上げ食文化の紹介をしてほしい。
- 県内芸術・文化活動を紹介すると、県内の文化活動が刺激され、波及効果が大きくなるので、今後も積極的に取り組んでほしい。

平成18年度財団助成事業を募集 申請期限4月30日（日）

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて平成17年度の助成事業を受ける団体を募集しています。

応募の方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を4月30日（日）まで（申請事業の実施が4・5月の場合は3月31日まで）に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは財団にお問合せ下さい。

対象団体の要件

- 1、福井県内に活動の本拠を置く団体
- 2、構成員（会員）が原則として20名以上の団体
- 3、平成18年4月現在で、原則として設立2年を経過している団体
- 4、営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
- 5、特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

助成団体の選考・決定

助成団体の選考は、当財団の理事、評議員の中から委嘱された「選考委員会」に諮問し、その答申に基づき助成を決定します。
助成が決定した場合は、速やかに申請団体と推薦団体に通知します。

財団イベント INFORMATION

げんでんふれあい コンサート2006	僕らのハーモニー 原田真二&大黒摩季	5/13(土)	福井市 フェニックスプラザ	入場料2,000円
文化講演会	講師 関西テレビ・元アナウンサー 桑原征平氏	7/8(土)	福井市 福井県生活学習館	福井県連合 婦人会と共催
スーパージャズライブ	ジャズピアニスト 松永貴志	7/22(土)	福井市 響のホール	福井テレビ主催 財団協賛 (前売り)3,500円

